

高大接続改革を追う ▶▶ 第15回

「高大接続改革を追う」のコーナーでは、高大接続改革に関するトピックスと、各大学の個別選抜の取り組み等を紹介する。

4～6月中にさまざまな情報が公表された。その中から、今回は、「令和3（2021）年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」（大学入試センター）、「2021年度入学者選抜に向けた各大学の検討状況について」（文部科学省）を中心にみていく。

各大学の個別選抜における多面的・総合的評価に関する取り組みについては、神戸大学が2019年度入試から実施している「志」特別入試をレポートする。

CONTENTS

Part 1

◆ 高大接続改革のトピックス p38

Part 2

◆ 神戸大学における取り組み p42

「志」特別入試は、高校生の普段の学習活動を受け止めるためのAO入試
入学前教育は課題研究のポスターセッションも行うなど本格的なプログラム

Part 1

大学入学共通テストの 出題教科・科目・時間・配点公表

初年度の大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は、2021年1月16・17日（土・日）に実施される。初年度の出題教科・科目・時間・配点などは<図表1>の通りである。共通テストの目玉の一つである記述式は、当初は国語と数学①で導入される。

国語はマーク式問題とは別に記述式問題の大問が出題される。記述式問題は小問3問で構成され、解答字数は最も長い小問で80～120字程度を上限として、他の2つの小問はそれよりも短い字数を上限として設定される。記述式問題の成績は大問全体と小問ごとの段階表示で行われる。これにより国語の成績はマーク式の200点と記述式の段階表示の2種類となる。マーク式の大問数とその配点は、近代以降の文章2問100点、古文1問50点、漢文1問50点で、大学入試センター試験（以下、センター試験）と同様である。記述式問題の導入により、国語の試験時間はセンター試験から20分延長され100分となる。

数学の記述式問題は数学①（数学I、数学I・数学A）のうち、数学Iの内容に関わる問題から、マーク式問題と混在させた形で数式等を記述する小問3問が出題される。記述式問題の導入により、数学①の試験時間も

10分延長され70分となる。なお、数学①の配点はマーク式、記述式を合わせて100点である。

理科については、理科②で出題されていた選択問題が共通テストから出題されないこととなった。

英語は「リーディング」と「リスニング」で構成される。センター試験の「筆記」で出題されていた発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は出題されない。これに伴い「筆記」は「リーディング」に名称変更される。また、「リーディング」と「リスニング」の配点は均等（各100点）となり、センター試験時の筆記（200点）とリスニング（50点）から大きく変更される。ただし、「どの技能にどの程度の比重を置くかは各大学の判断による」とされ、各大学の扱いが注目される。

英語の出題の難易度では、「リーディング」「リスニング」とともにヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）でA1～B1レベルに相当する問題が作成される。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視するとしている。「リスニング」は音声の読み上げ回数を、現在のセンター試験の2回読みから、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成へ変更して実施される。

そのほかのトピックスでは、過年度卒業者用の別問題は作成されない。高等学校学習指導要領に基づく学習範囲の中から出題されるという点については、前年のセン

ター試験と変更ないためである。なお、出題の範囲としては、教科書等で扱われていない資料等も扱う場合があると予告されている。これは、高等学校の通常の授業を通じて身に付けた知識の理解や思考力等を新たな場面でも発揮できるかを問うためとしている。マーク式の新たな出題形式として、いわゆる連動型の問題（連続する複数の問いにおいて、前問の答えとその後の問いの答えを組み合わせで解答させ、正答となる組合せが複数ある形式）を出題する場合があることも示された。大学に提供される個人別成績データは、これまで通りの得点合計、科目別得点に加え、新たに国語の記述式問題の全体および小問ごとの段階表示が提供される。また、参考情報として科目ごとの9段階の段階表示と国語の大問別得点も提供される。

成績提供については、私立大には2021年2月9日から、国公立大には2月11日から提供される予定だ。また、国公立大の共通テストを課す総合型選抜および学校推薦型選抜については、2月10日からとしている。いずれもセンター試験の成績提供日から1週間後倒しとなる。

基本的な考え方や 各教科・科目の問題作成方針を公表

次に「問題作成方針」についてみていく。共通テストの目的は、「高校等での基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握すること」である。そのため、問題作成の基本的な考え方として次の3点が挙げられている。

①センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、共通テストで問いたい力を明確にした問題作成

これまで問題の評価・改善を重ねてきたセンター試験における良問の蓄積を受け継ぎつつ、高校教育を通じて大学教育の入口段階までにどのような力を身に付けていることを求めるのかをより明確にしながら問題を作成。

②高校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題作成

<図表1> 2021年度入試 大学入学共通テスト 出題教科・科目・配点

教科	出題科目	科目選択の方法	解答方法	試験時間（配点）
国語	「国語」		マーク式及び記述式 (記述式は近代以降の文章のみ)	100分 (マーク式問題 200点及び記述式問題の段階表示)
地理 歴史	「世界史A」「世界史B」 「日本史A」「日本史B」 「地理A」「地理B」	出題科目 10科目のうち最大 2科目選択解答 ただし、同一名称を含む科目の 組合せは不可	マーク式	1科目選択 60分(100点) 2科目選択 130分(解答時間120分)(200点)
公民	「現代社会」「倫理」 「政治・経済」 「倫理、政治・経済」			
数学	① 「数学Ⅰ」 「数学Ⅰ・数学A」	出題科目 2科目のうち1科目 選択解答	マーク式及び記述式 (記述式は数学Ⅰの内容に関わる 問題のみ)	70分 (100点(記述式問題を含む))
	② 「数学Ⅱ」 「数学Ⅱ・数学B」 「簿記・会計」 「情報関係基礎」	出題科目 4科目のうち1科目 選択解答	マーク式	60分(100点)
理科	① 「物理基礎」「化学基礎」 「生物基礎」「地学基礎」	下記A～Dの選択方法により 科目を選択し解答 A：理科①から2科目 B：理科②から1科目 C：理科①から2科目＋ 理科②から1科目 D：理科②から2科目	マーク式	理科① 2科目選択 60分(100点) 理科② 1科目選択 60分(100点) 2科目選択 130分(解答時間120分)(200点)
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」			
外国語	「英語」 「ドイツ語」 「フランス語」 「中国語」「韓国語」	出題科目 5科目のうち1科目 選択解答	マーク式	英語 リーディング 80分(100点) リスニング 60分(解答時間30分)(100点) その他外国語 80分(200点)

* 2019年6月大学入試センター資料より

2009（平成21）年に告示された高校学習指導要領において育成することをめざす資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する。

また、問題作成のねらいとして問いたい力が、高校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入口段階で共通に求められる力を踏まえたものとなるよう、出題教科・科目において問いたい思考力、判断力、表現力を明確にした上で問題を作成。

③「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定

高校での「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視。

こういった基本的な考えのもと、出題教科・科目の問題作成の方針も示された。以下に国語、数学、英語、地理、歴史、理科（4単位科目）を掲載した。他の教科・科目については大学入試センターホームページをご覧ください。

◆国語

言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりすることなどを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

記述式問題は、小問3問で構成される大問1問を作成する。実用的な文章を主たる題材とするもの、論理的な文章を主たる題材とするもの又は両方を組み合わせたものとする。文章等の内容や構造を把握し、解釈して、考えたことを端的に記述することを求める。

◆数学（数学I、数学I・数学A、数学II、数学II・数学B）

数学的な問題解決の過程を重視する。事象の数量等に着眼して数学的な問題を見いだすこと、構想・見通しを立てること、目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順に従って数学的に処理すること、

及び解決過程を振り返り、得られた結果を意味付けたり、活用したりすることなどを求める。また、問題の作成に当たっては、日常の事象や、数学のよさを実感できる題材、教科書等では扱われていない数学の定理等を既知の知識等を活用しながら導くことのできるような題材等を含めて検討する。

◆英語（一部抜粋）

- ・「リーディング」「リスニング」ともに、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- ・「リーディング」は、さまざまなテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。
- ・「リスニング」は、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

◆地理（地理A、地理B）

地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては、思考の過程に重きを置きながら、地域をさまざまなスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

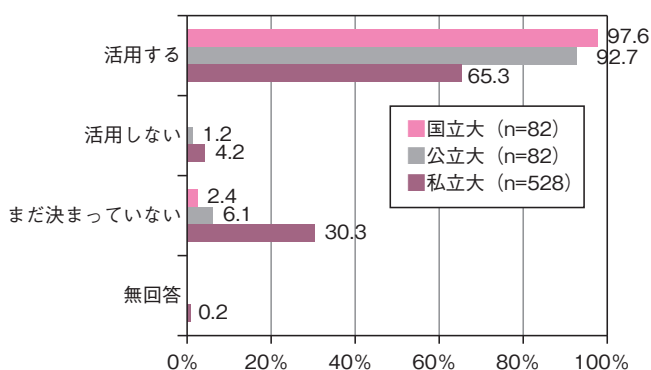
◆歴史（世界史A、世界史B、日本史A、日本史B）

歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

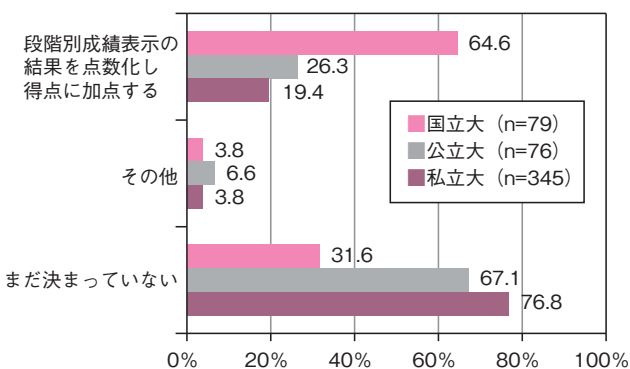
◆理科（物理、化学、生物、地学）

科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を

<図表2> 大学入学共通テストの活用（設置者別）



<図表3> 大学入学共通テストにおける
国語の記述式問題の活用方法（設置者別）

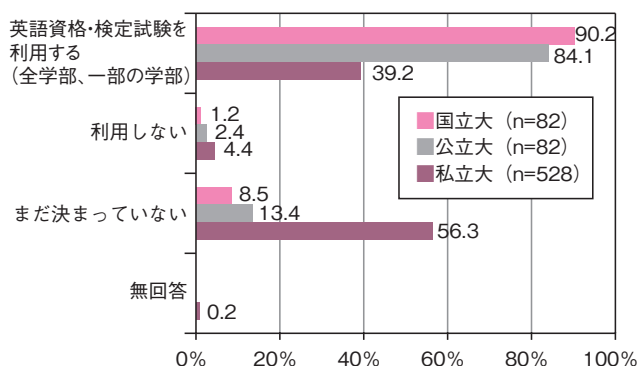


基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する。問題の作成に当たっては、受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題や、観察・実験・調査の結果などを数学的な手法を活用して分析・解釈する力を問う問題などとともに、科学的な事物・現象に係る基本的な概念や原理・法則などの理解を問う問題を含めて検討する。

2021年度入試に向けた各大学の動き

文部科学省が5月31日に公表した「2021年度入学選抜に向けた各大学の検討状況について」^(注)によると、共通テストの活用については<図表2>の通りとなり、国公立大は9割以上が「活用する」と回答した。一方、私立大は「活用する」は65.3%にとどまり、3割は「ま

<図表4> 英語認定試験における
英語資格・検定試験の利用について（設置者別）



* 「2021年度入学選抜に向けた各大学の検討状況について」(文部科学省、2019年度5月31日公表)をもとに作成

だ決まっていない」と回答した。

共通テストにおける国語の記述式問題の活用方法<図表3>については、国立大では「段階別成績表示の結果を点数化し得点に加点する」が6割を超え、「まだ決まっていない」は3割程度だが、公立大は67.1%、私立大は76.8%が「まだ決まっていない」と回答した。

英語認定試験における英語資格・検定試験の利用<図表4>については、国立大は9割、公立大は8割を超える大学が「利用する(全学部、一部の学部)」と回答したが、6割近い大学が「まだ決まっていない」と回答している。

さらに英語資格・検定試験を利用する大学について、活用方法を聞く設問では、「各資格・検定試験とCEFRとの対照表に基づき、共通テストの英語の得点に加点する」(国立大32.4%、公立大18.8%、私立大5.8%、以下同様)、「一定水準以上の試験の結果を出願資格とする」(国立大27.0%、公立大13.0%、私立大5.3%)といった回答が多い。また、「その他」が国立大13.5%、公立大13.0%、私立大13.5%となっているのも目を引く。さらに「まだ決まっていない」も、国立大24.3%、公立大53.6%、私立大56.0%となっており、公立大、私立大では英語資格・検定試験を利用する大学のうち、半数以上の大学が活用方法を決めていないことがわかった。

なお、国立大(一般選抜)については大学ごとに英語認定試験の活用予定(5月13日現在)が公表されている。詳細は文部科学省のホームページをご覧ください。

(注) 調査期間は2019年1月11日～2019年1月25日、回答は3月19日まで受付、回収率9割。

「志」特別入試は、高校生の普段の学習活動を受け止めるためのAO入試

入学前教育は、課題研究のポスターセッションも行うなど本格的なプログラム

神戸大学

神戸大学は2019年度入試より、学力の3要素を多面的・総合的に評価し、特色ある学生を選抜する、「志」特別入試を実施している。

「志」特別入試は、神戸大学の入試改革を先導する存在ともいえる入試制度で、第1次選抜では書類審査、模擬講義・レポート、総合問題が課される。最終選抜は、学科・専攻による独自の小論文、面接・口頭試問、プレゼンテーションなどが課され、化学演習・発表が課される学科もある。この「志」特別入試が導入された経緯や初年度の実施状況について、アドミッションセンターに話を伺った。

**「高大接続改革実行プラン」が契機となり
学内で議論を開始
新しい入試の実施のため
アドミッションセンターを設置**

神戸大学アドミッションセンターは、「志」特別入試を主に担う部署として2016年に設置された。設置の経緯について、神戸大学アドミッションセンター長の高橋真教授は「契機となったのは、2015年1月に文部科学省が発表した『高大接続改革実行プラン』です。これを受けて、神戸大学では学力の3要素を測る入試へ転換することが学内での方針となりました」と語る。そして、こうした方針を受け、2015年6月に入試担当理事の下に入試改革推進本部が設置され、神戸大学の入試改革の将来計画等の企画立案を検討することになった。この本部の会議で入試改革についての議論を行い、改革案を入学試験委員会などへ提案する。こうしてさまざまな議論を経て、2016年4月に大学全体で取り組む特別入試を担う部署としてアドミッションセンターが設置された。

「2016年3月31日に『高大接続システム改革会議最終報告』が発表され、学力の3要素を多面的・総合的に評価するために、面接に加えて、調査書の活用や入学



高橋真 教授

吉田健三 特命准教授 進藤明彦 特命准教授

希望理由書など多様な評価方法を取り入れて、主体性・多様性・協働性を評価することが求められました。そこで、特別入試もそれらに配慮して行うことになり、入試改革推進本部等で議論を進め、特別入試の方針を決めました」（高橋教授）

特別入試の方針とは、「一般入試改革に先行して特別入試を実施する」「学力の3要素を多面的・総合的に評価して特色ある学生を選抜する」「特別入試は神戸大学の入試改革を先導する位置づけとする」などである。こうした方針に基づいて、アドミッションセンターでは発足以来、「志」特別入試を2019年度入試より実施するための準備を着々と進めてきた。

**入学後に神戸大学で学修するための
十分な学力を備えていることが必須要件
「志望理由書」「活動報告書」等を
記入するための詳細な手引き書も作成**

「志」特別入試の制度設計段階では、各学部・学科等からは入学後の学修について心配する意見が寄せられたという。制度設計の議論を進める中で、「特別入試は、特に主体性を持つ学生を求める入試制度ですが、同時に、入学後も一般入試で入学した学生と同じように学修が進められる学力を求める必要があるとの結論となりました」（高橋教授）

そのため、求める学生像としては「それぞれの分野のリーダーとなって、21世紀の人類社会に大いに貢献したいという高い志をもつ学生」に加えて、「神戸大学で学修する十分な学力を備え、主体性・多様性・協働性に富む学生」の2つとした。なお、「志」特別入試という名称は、武田廣学長の命名によるものだ。名称には、神

戸大学からグローバルリーダーを輩出する、という強い意志が込められている。

選抜方法は、まず書類審査から始まる<図表1>。受験生が提出する書類は、「志望理由書」「活動報告書」で、活動実績の裏付けとなる資料も必要である（一部の学部ではその他の書類も必要）。この中でも重要な書類は「活動報告書」で、受験生は最大で5つまで活動実績を記載できる。その上で一番アピールしたい活動実績を詳細に記入し、主体性を持って多様な人々と協働して活動した記録も記入する。この「活動報告書」を記入するための手引き書がホームページで公開されているが、30ページ以上にわたって詳細な記入例が示された手引書となっている。この他、調査書に加え、高校の教員に記入してもらう「学業等評価書」もある^(注)。

**第1次選抜では「模擬講義・レポート」「総合問題」を実施
「総合問題」は英文、日本語、数学、理科を出題**

第1次選抜では、さらに「模擬講義・レポート」と「総合問題」が課される。いずれも文系と理系で内容が異なる。「模擬講義・レポート」の講義は約45分で、2019年度入試のテーマは文系が「茶の文化史を考察する」であった。茶の文化についてさまざまな分野からアプローチする内容で、講義後に問題を解く。アドミッションセンター吉田健三特命准教授によると「講義に使用するスライド資料を配付しているので、講義のメモが取れていれば、確実に得点できる内容」とのことだ。この問題に加えて、講義内容とそれに関連した資料について交わされた会話文の空所補充問題なども出題された。

理系の2019年度入試のテーマは「大学の理系学部における学修—環境問題を題材に—」であった。講義時間は文系と同じ約45分だ。講義後に講義に基づく設問の

<図表1> 「志」特別入試 出願から入学までの流れ



(2020年度神戸大学「志」特別入試リーフレットより抜粋)

ほか、仮想実験の結果を見て考察し、仮説を立てて、それを検証するための実験を考える問題や、計測装置を自分で考える問題もあった。アドミッションセンター進藤明彦特命准教授は「出題された問題は知識を問うものではありません。科学的なものの見方・考え方を問う内容です」と話し、高橋教授も「高校での授業や活動に普段からきちんと取り組んでいる高校生であれば、それほど難しい問題ではないかもしれません」と説明する。

午前中の「模擬講義・レポート」は120分を要する。ちなみに、講義は音声入りのパワーポイントがスクリーンに投影されるため、教室が複数にわたっていたとしても内容に全く差はない。午後は「総合問題」があり、文系、理系ともに「総合問題Ⅰ」と「総合問題Ⅱ」の2つが課せられている。「総合問題」は各120分のため、試験時間は計4時間になる。

文系の「総合問題Ⅰ」は、関連した複数の日本語を総合した出題と数学（数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B）を内容とする出題で、配点はほぼ半々である。文系の「総合問題Ⅱ」は、内容が関連する1つの日本語と2つの英文を用いた出題を含む。このような複数の資料を総合するという出題内容は、大学入学共通テストの試行調査の出題内容を意識しているようだ。

(注) 調査書の様式が変更される2021年度入試から廃止される予定。

<図表2> 2019年度 「志」特別入試 入試結果

学部	学科	専攻・コース	募集人員	志願者数	合格者数	最終選抜内容
文学部	人文学科		3	24	3	小論文、面接・口頭試問
国際人間科学部	環境共生学科		5	14	3	ポスタープレゼンテーション・小論文、面接・口頭試問
法学部	法律学科		3	20	4	面接・口頭試問
医学部	保健学科	看護学専攻	2	8	2	課題提示・プレゼンテーション・面接
		検査技術科学専攻	2	2	2	課題提示・プレゼンテーション・面接
		理学療法学専攻	2	8	2	面接
		作業療法学専攻	2	0	0	模擬実習・面接
工学部	建築学科		2	3	1	小論文、面接・口頭試問
	市民工学科		2	0	0	小論文、演習、面接・口頭試問
	電気電子工学科		2	1	1	プレゼンテーション・口頭試問
	機械工学科		2	2	1	総合問題（機械）、プレゼンテーション、面接・口頭試問
	応用化学科		2	7	3	化学演習・発表、口頭試問
	情報知能工学科		2	1	1	総合問題（情報知能工学）、面接・口頭試問
農学部	食料環境システム学科	生産環境工学コース	2	4	1	面接・口頭試問
		食料環境経済学コース	2	2	1	面接・口頭試問
	資源生命科学科	応用動物学コース	1	0	0	課題提示・プレゼンテーション・面接
		応用植物学コース	1	3	1	課題提示・プレゼンテーション・面接
	生命機能科学科	応用生命化学コース	1	5	1	実技試験・面接・口頭試問
		環境生物学コース	3	5	3	課題提示・プレゼンテーション・面接・口頭試問
海事科学部	グローバル輸送科学科	航海マネジメントコース	5	7	1	模擬実習・面接・口頭試問
		ロジスティクスコース	1	0	0	面接・口頭試問
	海洋安全システム科学科		1	0	0	小論文、面接・口頭試問
合計			48	116	31	

理系の「総合問題Ⅰ」は、英文を主とした出題と数学を内容とする出題だ。数学の出題範囲は、高校による授業進度を考慮して、数学Ⅲは含まず、数学Ⅱ・数学Bまでとしている。理系の「総合問題Ⅱ」は、物理、化学、生物の3問から2問を選択する。ただし、医学部保健学科は、一般入試の前期日程の個別試験で理科は1科目のみを課している専攻があることから、「総合問題Ⅱ」も1問を選択する仕組みとしている。

ここまで本格的な問題が出題されているのは、前述の

ように入学後の学修を考慮しているためである。第1次選抜に合格した受験生は、各学部・学科・コース・専攻が独自に行う最終選抜を受けることになる。小論文、面接・口頭試問、プレゼンテーションなどのほか、模擬実習、化学演習が課される学科・専攻もある。第1次選抜と最終選抜の配点に加え、第1次選抜の「書類審査」「模擬講義・レポート」「総合問題」の配点も各学部・学科・コース・専攻が独自に設定している。第1次選抜を担うアドミッションセンターのみならず、各学部・学科・コ

ース・専攻にとっても、入試実施の負担は重いといえるが、高橋教授は「確かに負担は重く、今後の実施体制を検討する必要性はありますが、『志』特別入試の趣旨にあった学生が来てくれて、本当に良かったと多くの教員が受け止めています」と話し、大学としても「志」特別入試に手応えを感じているようだ。

ところで、初年度の志願者の出身地域は大阪府、兵庫県などの近畿圏が多かったが、千葉県や九州・沖縄からも出願があり、出身高校も、約半数はこれまで一定の入学者がいる高校だが、約2割はこれまで志願者がほとんどいなかった高校とのこと。新しい入試によって、新たな志願者層を開拓できたとも言えるだろう。

入学前教育は、学習意欲の継続と 高校現場への配慮を重視 全員が参加する課題研究の ポスターセッションも実施

選抜方法に加えて、「志」特別入試のもう1つの特徴が、充実した入学前教育である。入学前教育に力を入れているのは、最終の合格発表が11月下旬のため、合格後に約4カ月間のブランクが生じるからだ。高橋教授は「せっかく志を持って、受験し、合格したのだから、勉強を継続してもらいたいし、早期合格による高校への影響にも配慮しました」とその背景を説明する。

第1回スクーリングは冬休みに入ってから実施され、ガイダンスに加えて、プレゼンテーション実習では、自己紹介スライドを作成し、相互プレゼンテーションなどを行った。この第1回スクーリングの実施前も、各自で学校の学習に取り組んでもらい、2週間ごとに報告してもらいなど合格者への支援は手厚い。スクーリング後は教科の課題が出されるが、生徒によっては理科の未履修科目の学習が課されるなど、きめ細かい対応を行い、さらに添削指導も実施。この入学前教育プログラムは3月まで続く。こうした課題提出や生徒へのフィードバックには、神戸大学の在学生向けの学習管理システムBEEF (Basic Environment for Educational Frontier) が使われている。本来は入学後に使用するシステムで、課題に取り組む生徒にとっては、一足早く学生生活が始まっているような感覚だろう。

さらに、入学前教育の大きな特徴は、課題研究が課せられていることだ。各自で取り組む課題研究は、高校で既に取り組んでいるテーマを引き続き行う生徒もいれば、

新たにテーマ設定をして実験を行うなど意欲的に取り組む生徒もいたそうだ。課題研究での取り組み内容は、全員が第2回のスクーリングの際、ポスターセッションで発表する。このポスターセッションは、発表した生徒同士も互いに議論し合うほか、各学部学科等の教員も参加して質疑が行われるなど活況となった。

高校での普段の学習活動が 合格につながる入試制度を志向

順調に始まったように見える「志」特別入試だが、課題はあるのだろうか。「十分な志願者数の学科もありますが、志願者数が少ない学科もあるため、この点は課題と言えます」(高橋教授) <図表2>。また、高橋教授は作問・採点など実施面の継続性も課題の1つとしつつも「実施の負担はありますが、そのためにアドミッションセンターが設置されています。募集人員以上の合格者を出した学科もあり、学内でも期待されていると思います。苦労はありますが、続けていきたい」と意欲的だ。また、進藤特命准教授は、「できれば募集人員が増えてほしいと思います。また、一部の国立大学で行われているように、入学後の独自教育プログラムでさらに力を伸ばす仕組みがあっても良いでしょう」と学士課程教育との連動性を指摘する。

こうした課題はあったとしても、初年度としては期待通りの結果が得られたといえるのではないだろうか。吉田特命准教授も「AO入試とは言え、入学前教育もしっかり行っています。まる1日をかけて試験が行われ、実施をする側も大変ですが受験生も大変だったと思います。そういう厳しい入試を乗り越えた合格者は本当に優秀です」と言葉に力を込めた。

最後に高橋教授は、「『志』特別入試は、高校での取り組みをそのまま受け止め、特別な勉強をしなくても、普段の学習活動が合格につながる入試だと考えています。普段の活動をきちんと評価することが、本来の多面的・総合的評価だと考えています。高校の先生方には、ぜひ、志のある生徒さんに受験を奨めてほしい。意識の高い主体性のある学生が、周りの学生をリードして、良い影響を与えると大学は活性化します。『志』特別入試にはそれを期待したい」と結んだ。